

セッションII 「越境する文学の諸相～ことばを越える・ジャンルを越える～」

本当のバイリンガル

田 原*

本当のバイリンガルって何だろう。

これについて時に考えています。

文化・情報などのグローバリゼーションによってグローバルな創作者は増えつつあるように思われます。グローバルな創作とは、英語圏とフランス語圏において、あるいは中国語圏と日本語圏においても、自分の母国と遠く離れ、多和田葉子の言葉を借りて言えば「エクソフォニー」(exophony、この単語は辞書に載っていませんが、意味としては母語の外に出た状態を指す)であります。つまり「母語の外に出て書く」ということです。しかし、自分の「母語の外に出て書く」人は皆バイリンガルと言えるのでしょうか。今日はこのテーマに絞ってお話をさせていただきたいと思います。

「母語の外に出て書く」ということには二つのことが考えられます。

一つは、移民作家です。例えば1960年に、6歳の時に家族とともにイギリスに移民した英語作家の石黒一雄(1954-)など、彼のような移民作家は英語のような大きい言語圏に昔から存在しています。日本で移民作家と言うと、まず思い出されるのは在日韓国人作家たちでしょう。アメリカで言えば、アジア系、ラテン系、ロシア系、南米及びアフリカ系出身の移民作家は数え切れないほど存在しています。お互いの言語が血縁関係に近い西ヨーロッパの場合もそういう移民作家はもっといるかも知れません。それから植民地時代に強制的に支配者の言語を覚えさせられ、自分たちの

母語を放棄せざるを得なかった、その母語を冒された屈辱をなめつくした非移民作家もこの範囲に入ると思います。

もう一つは、バイリンガル作家です。このバイリンガル作家たちの中にも、私はまたA、B、C三種類に分けられるべきだと考えています。

Aの場合は自分の母語の形が固定してから後に習得した外国語だけを持ってものを書く人を指します。つまり自分の母語では書かない若しくは書けない、外国語という片方の言語だけで創作すること、このようなバイリンガルを私は「片翼表現者」と定義したいと思います。「片翼」ですから、空を飛ばうと思っても自在に飛ぶことはできません。このような作家たちが、自分の母語ではなく、その後に覚えた言語で、いくら文学関係の賞を受賞したとしても私はその賞が十全な評価を与えたとは言い難いと思います。私はあらゆる文学賞は一つの参考基準に過ぎず、賞よりも、文学作品に質感があるかどうか、あるいは時間の検証に耐えてきたかどうかという結果を重く見たいと考えています。これは決して母語ナショナリズムというのではなく、私はそういうふうにかえたいのです。そしてこの場合、ジャンルはエッセイと小説に限られると私は考えています。詩を書くことはなぜできないか? その理由については後に述べたいと思います。

Bは母語と外国語という両方の言語でものを考えて創作行為を行う人を指します。このBの範疇に入る条件は、二つの言語で書かれたものが、言葉の表現、あるいは文学性において質感の落差が

* 詩人、城西国際大学

あまり見られず、いわばほぼ一致したレベルに留まっているということです。このようなバイリンガルを「両翼表現者」（日本語に二足歩行という言葉もありますが）と言うことにしましょう。

Cの場合は多民族、多言語の国にいる作家たちを指します。中国で言えば少数民族作家がこれにあたります。つまり同じ国に居て、自分の民族の言葉（小言語）で創作する作家たちが、後に自分の母語とともに、その国に定められた共通語（大言語）で創作するように変身することです。例えば中国のチベット族作家、ウイグル族作家など。シンガポールならば、中国系、インド系そしてマレーシア系の作家たちのことが思い出されますが。

Aの片翼でしか飛べないバイリンガルよりも、Bの両翼で二つの言語でまたがって自由自在に飛び回れるのが本物のバイリンガルなのではないでしょうか。この本物のバイリンガルということで言えば、二人の名前が浮かび上がります。一人は林語堂（1895～1976）中国語ではリン・ユイタンと読みますが、もう一人は文頭にも言及した多和田葉子（1960～）です。ほかにももちろんいますが、作品をあまりたくさん読んでないので、細かく言う資格がありません。

同じバイリンガルと言っても、小説とエッセイを書くことと詩を書くことは別次元だと思います。こういう言い方をしますと、詩は独りよがり小説とエッセイを凌駕していると言っているのではないかとされるかもしれませんが、そうではありません、何故なら、母語の寵児といわれる詩人は「言語の秩序を作る」（加藤周一）稀な人種だからです。あるいはロシア・フォルマリズムの作り出した概念で言えば「詩の言葉というのは異化された言葉で」なければならぬからです。少し大げさに言いますと、詩はほかのジャンルより、魂を解釈する力を持っているということです。

そういう意味で詩人はほかの文筆者より言葉のパスワード（言葉の秘密、あるいは神秘性など）を熟知していなければなりません。ここで言う言

葉のパスワードの中には辞書に載っている意味だけではなく、長い歴史の間にその民族の風俗習慣と生きる経験のもとで暗黙の了解によってできた意味が含まれています。当然ながら、詩人が新たに付加した創造性のある意味もその中に入っていないければなりません。つまり一つの単語若しくは言葉の裏と表を熟知しているということです。そうでなければ、おそらく言葉の本質あるいは言葉の深層構造までを表現することはできないのではないかと思います。

明治時代の知識人に限って言えば、多くの作家・詩人が皆立派なバイリンガルと行うことができるでしょう。例えば現代の中国人のレベルを上回る一流の漢詩を書いた正岡子規、夏目漱石、森鷗外などです。戦後で言えば漢文学者の吉川幸次郎などもその一員だと思います。遡ればもちろん一千年あまり前に編纂された漢詩集『懐風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』、『和漢朗詠集』などもあります。しかしこの近現代の彼らが書いた漢詩を読むと、中国語を母語としない者が書いたとは思えないほどで、その見事な腕前に感心せざるを得ません。中国語がまったくできない夏目と森の場合は特にそうです。これはもちろん中国語と日本語の長い歴史による特殊な関係性があるからそうなったとしか考えられません。漱石の漢詩を見てみましょう。

竹密能通水
花高不隠春
風光誰是主
好日属詩人

——夏目漱石「春日偶成 其二」

獨坐聽啼鳥
關門謝世嘩
南窓無一事
閑寫水仙花

——夏目漱石「題白画」（白画に題す）

この二編だけの漢詩を読むと、中国語を母語とする者にとっても誇りに思えるほどのできです。ここでふと以前読んだことのある丸谷才一の言葉を思い出します。明治の人には「和漢洋の才能が必要だ」と。漱石の書いたほかの漢詩を読んでも、その全てが漢詩の押韻、平仄、対句、字数などの厳しい規則にきちんと合わせているだけではなく、漢詩としての「語感」と「意味」においても、中国人にとっても勉強になるほどの上等の品を備えています。

さて林語堂ですが、彼が英語圏で広く知られたのはおそらく1935年、ニューヨークのジョン・ディ社から出版されベストセラーとなった『My Country and People』だと思います。中国語の書名は『吾国与吾民』ですが、1938年7月に日本でも邦訳ができ、出版された本のタイトルは『我国土・我国民』（新居格訳）となっています。この本は翻訳されたものではなく、林語堂が自ら英語で書いた本です。彼になぜそこまでの語学力と文章力が備わったのかというと、彼自身の母語力が元々高かったことと、母語で高い教養を蓄積していたことがその力に繋がったのではないかと私は思います。彼は英語作家になる前に、すでに作家、言語学者、思想家、翻訳者として漢語圏で広く読まれ認知されていました。彼には二つの言語圏で認められるほどの広く深い文化的素養・教養があったのです。彼は二つの言語を使いこなし、二つの文壇で活躍し、二つの言語の読者に愛読されました。これこそ本物のバイリンガルだと私は考えたいです。いわゆる、両翼で飛ぶ者です。コスモポリタンであり、また自由主義者であった林語堂は「世の中の強盗の罪で、私たちの思想の自由を奪う罪より、大きいものは一切ない」と書いたことがあります。毛沢東時代に合わないこの言葉がその時代はかなり冷遇され、排除させられてしまったことは、理解できないことではないでしょう。彼の言葉がこのような扱いを受けたのは大きな時代錯誤であり、一方的にイデオロギーと政治に影

響された結果だと思います。一貫して反共産主義者としての姿勢を貫いた林語堂はその時代においてほかに比肩する者がいないほど優れた人物であり、当時は魯迅などより、国際的に知名度もあったし影響力もあったのではないかと思います。魯迅の研究者であり翻訳者としても有名な竹内好は林語堂について「貧弱な思想家」と書いていますが、私はこれには賛同できません。若しかすると、竹内はあの赤一色の狂気じみた社会主義と文革運動に少し洗脳されていたのかもしれませんが。というのは、中国では改革開放してから、林語堂は新たに再認識、再評価されるようになったからです。

多和田葉子に関しては、多分、日本語を母語としている皆さんの方が私よりかなりたくさん読まれているのではないかと思います。皆さんもご存知のように、彼女が初めて学んだ外国語はロシア語ですが、ドイツに移住してからすでに30年近くなり、今は日本語とドイツ語で創作を行っています。両言語において数々の重要な文学賞を受賞したことだけではなく、多くの新聞や雑誌で精力的に執筆活動を行っていることを考えると、もちろん彼女の才能と努力の結果ですが、彼女は両翼で飛ぶ正真正銘なバイリンガルだと思います。私は彼女に到底及ばないのですが、彼女は私にとってとても身近な存在です。私は数年前から、現代詩のイベントに何度も出席していますが、その時一緒にになった彼女からドイツ語と日本語の対訳の詩集をいただきました。その詩集を読み終わった時に、彼女の一部の詩は、殆ど「意味先行」の詩人の詩に対抗するともいうように「リズム先行」の詩だと思ったのです。ある意味で彼女の詩は実験的あるいはシュールレアリスム的な試みだと思います。たとえ現代詩において荒唐無稽さとナンセンスの本質を表現するのに限界があるとしても、彼女の詩を見てみましょう。

高 ビ の ヤ ク
層 ル チ ッ
じっばな設計士でも つまづいて
やったれ かぶれ しゃっつ やぶれ
ゆか
引き裂いて (ひゅ—— きさいて)
紙が
欄外に お乳 (ちちぺっくす) を出す
設計ミス美人
ガラス履歴書をコピーしている
それは
あの女では な ですか
ファスナーが似ているの
で姉妹かとまちがえられる
別々の過。
去はかっこにくるんで資源ゴミ
「だったはず」
いきなり相手の乳首を
あちらは あちらで
のほほんと
ボ タ ン を か け わ す れ た
餅肌
ぼたんゆきの ぼんぼり あ あ あ
かるさが 飴
ほほに はに むっちりと
点滅
ちゅちゅ 電源接触の
チュウウ
——多和田葉子「出逢い (傘の死体とわたしの妻より)」

もちろん、彼女は「意味先行」の詩も書いています。

くるぶしの高さにはりつめた
ミルクの池に
女が尻をひたしてしゃがむと
ひとすじの血が

蓮の模様に浮かびあがる

お寺の鐘の音に
乳房の中の卵が割れて
口の中が羽毛でいっぱいになる
横たわれ、魔法の絵筆
菩提樹の木の下に
ねむれ
まぶたのバイオリン

石の中に閉じ込められた鳥のさえざりが
風景に穴を穿ち
風の中のハチミツが
時間に寄り道をさせる

——多和田葉子「島 (あなたのいるところ
だけ何もないより)」

多和田葉子が詩を書く時はドイツ語ではなく日本語で書いているようですが、同じ日本語の詩としても、彼女の場合は何か今までの定められているかのような現代詩の規則を打ち破ろうとしているように思うし、つまり表現の新しい可能性を探っているようにも思います。だから、書かれた一部の作品は外国的若しくは多国籍っぽいところが感じられます。時に詩行に色々な外国語の単語が登場したりして、そこには異化されたイメージと効果が現れているのですが、これはおそらくバイリンガルに導き出されたものに間違いのないでしょう。

そろそろ私の話は終わりにしなければなりませんので、最後に林語堂の名言を引用して私の講演を締めたいと思います。

「紳士の講演は、女性のスカートのように、短ければ短いほうがよい」ということです。

ご静聴ありがとうございました。

2014年6月28日 稲毛海岸にて

* 本稿は『現代詩手帖』2015年3月号にも掲載予定である。